資源環境経済学特別演習 II 議事録（ 5 月）

２０１１ 年 度 第 １ 回

報告題名　東アジアにおける植物油ビジネスの動向	
報告者　八木浩平	**日時**　5 月 26 日　午後 3 時～
（所属分野）　国際開発学分野	**場所**　第 2 講義室
座長　水木麻人	**議事録担当者**　渋谷俊

出席者

木谷、小山田、米倉、冬木、高篠、伊藤(房)、石井、韓、スチン、八木、水木、宮里、池田、易思、威廉、王(毓)、金(喆)、滝田、覃、中村、堀、山口、林、泉井、Intan、Sudirman、Lies、高橋、金(銀)、黄、渋谷、室井、慧、徐、趙、Manalo、劉、王(偉)、井坂、伊藤(まき子)、佐藤、庄司、丸林、門馬

報告要旨

2010 年 10 月、日本政府による環太平洋戦略的経済連携協定(以下、TPP)への参加検討が表明されて以来、市場開放への議論が活発化している。こうしたグローバル化の進展により、大きな影響を被る部門の 1 つが、食料の生産から消費までの場としてのフードシステムである。特に、今回の TPP は全品目の関税撤廃を前提としており、その影響は一次産業のみならず、二次産業の食品加工部門にも波及することが見込まれる。

こうした、グローバル化の進展に伴うフードシステムの変遷を捉える既往研究として、例えば高柳長直著の『フードシステムの空間構造論 グローバル化の中の農産物産地振興』(筑波書房, 2006)等があるが、類似研究も含めて、こうした議論は一次産業に関する考察に終始しており、食品加工部門への影響はこれまで考察されていない。

本報告は、食品加工部門も含めたフードシステムの新しい展開を捉える為、日本を中心とした東アジア全体における植物油ビジネスの動態を整理することを目的とする。具体的には、これまで得られた全ての成果を明らかにし、今後の研究課題と計画について論じることを課題として設定したい。植物油は、日本において TPP 参加による製品輸入の拡大が懸念される他、近年、穀物メジャーによる中国での搾油事業参入が活発化しており、東アジア全体のフードシステムの変遷を捉える上で、適切な研究対象と考える。

質疑・応答

山口：企業間の分析をかなりされているようですが、もう一度研究の目的を説明してください。
なにを目的に分析を行なったのか。他の分析との結びつきがいまいち把握できなかったので、よろしくお願いします。

八木：目的としましては、穀物メジャーが事業シェアを持っている東アジアにおける植物油ビジネスの動向を大きく捉えようとすることです。その時の捉え方は、企業行動や磯田さんが定義されている市場構造という観点からです。市場構造は、水平的構造と垂直的構造に分かれていて、供給者から流通者、消費者と縦に並んでいるとして、例えば、供給者の水平的構造が独占的あるいは寡占的な少数しかいない場合は、交渉相手が少ないわけですから、流通者の価格交渉がなかなか進まず、統合が進む可能性があります。つまり水平的構造と垂直的構造はつながっている部分があるので、それを全部みてしまおうとするのが論文でいいたいことです。

山口：全部を対象としているのですか

八木：そうです。その中で特に東アジアと植物油業界というのに絞って、最大限自分ができる範囲でおこなっております。

池田：確認したいことがあります。
水平的構造とは、アライアンスっていう認識でいいのですか？垂直的構造というのは、所有権の統合度といったことでいいのですか？

八木：まず水平的構造についてですが、その前に申し訳ないですがアライアンスについて教えてください。

池田：自動車産業にみられるような、企業同士で提携し共同で事業をおこなうことです。

八木：ありがとうございます。
そういった部分もみるかもしれませんが、水平的構造に関しては、磯田さんの定義に沿った市場シェアなどが主な対象となります。

池田：あと、内容は東アジアにおける企業の商売方法をみていくということだと思うのですが、その前提として今の東アジアにおける企業行動についての理論については、既存の理論を適用するということなのですが、現段階ではその企業行動を否定するような法律などについては議論されている中で、それを度外視して将来予測を立てるのは経済学的な研究としてはあまりきかない。既存の研究だけを用いて、将来予測を立てるっていうこと自体ありなのか教えてください。

八木：自分自身そこまで考えていた訳ではないので、答えることができません。検討する必要があれば検討します。

池田：あと、メインの文献はこの磯田さんの文献ですか？

八木：本当は磯田さんの研究の元になっているマリオンという人の文献を読みたいのですが、現在注文中のため、これから勉強したいと思っております。

木谷：まず一つ、研究の目的がよくわからない。ドクター論文なので、例えば垂直的構造と水平的構造にもう一つ新たな視点を加えるとして、もう少し抽象的な部分で新たな分析枠組みをつくって、それから分析する必要があると思います。もしくは分析をして、さらに政策提言であったり国際的な協定への提言等も行うなど。つまり、どこに研究目的があるのかはっきりしない。

八木：まず目的に関しては、一番きかれたらまずいと認識しておりました。
自分の意識としては、穀物メジャーの食糧の分配について問題意識を持っています。
木谷：では、その分配について評価するような枠組みをつくって実際に評価してみるのはどうか。
そのためには、自分の中でしっかりした評価軸を持ってなくてはいけないと思います。現在の状況を記号であらわせるような抽象的なモデルがあればすっきりするかもしれない。結局、研究のポリシーがみえない。食糧の分配について問題意識があるのもみえない。コメントでした。
八木：ありがとうございました。